

ねじりはちまき

12月 師走^{しわす} 大雪 冬至の季節になりました。

12月7日大雪です。8日針供養、25日クリスマスです。

年の瀬も迫って参りました。皆様には本年も並々ならぬお世話様になりました。誠に有難く厚く御礼申し上げます。また、来年も旧に倍してのご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

1年のうちで1番昼が短い日『冬至』、明日からは日が長くなり、新しい太陽の誕生で『冬至正月』とも言われています。また、『冬至冬中、冬はじめ』とも言われ寒くなるのはひと月ほどずれて1月の末から2月にかけて、寒くなるようです。地球は大きいので、冷えるのに時間がかかるんだそうです。

新しい年を迎えるために一日一日を大切に、一家揃って良い歳をお迎えされます事をお祈り申し上げます。

幸田常一

<会社近況>

本格的に寒さが厳しくなってきました。朝、布団から出る勇気が欲しい時期ですね。まもなく雪が降ってきますので、路面凍結など注意したいものです。ただいま郡山市の住宅新築をお世話になっておりましたがお蔭様で完成いたしました。

<年末年始休業のお知らせ>

令和3年12月30日(木)～令和4年1月5日(水)まで

年末年始休業期間中は何かとご迷惑をおかけいたしますが、何卒ご了承の程、お願い申し上げます。尚、令和4年1月6日(木)は平常営業となります。

<商品紹介>

玄関に手洗い場を作るお家が増えています。
お家で安心して過ごすためにも、お家の中まで
菌やウイルスを持ち込まないことが重要に
なってきますね。すっきり、コンパクトな
洗面台があれば、帰宅後すぐに手を洗う
ことが出来、便利です。



<Housetec>カタログより
詳細は弊社までどうぞ(^^*)

<すまいの点検>

①害虫・害獣対策

シロアリやゴキブリなどの害虫や、ねずみ、ハクビシンなど屋根裏に巣作りする害獣もいます。冬になると野外にエサが無くなってくる為、屋内への侵入が増えます。食品や残飯の管理・処分は徹底して室内はいつも清潔に保ちましょう。

令和3年12月5日発行

有限会社 幸田建設

<発行責任者>幸田久美

〒969-1204

本宮市糠沢八幡 1-1

電話 0243-44-3816

<後記>

今年も残すところあとわずかになりました。2021年はどんな一年でしたでしょうか。2022年、健やかに過ごせる一年でありますように。

(ほしの)

アイヌ民族について

今回は我が国の先住民族である北海道のアイヌ民族について取り上げる。アイヌ民族について関心を持ったのは、現在小生が人権擁護委員として勤める中で、アイヌ人が差別を受けるような事態が度々あると聞いていたのと、数年前に北海道別海町に住む妻の姉を尋ねた折、阿寒湖畔にあるアイヌのコタンを尋ねてアイヌ文化の一端に触れ、感動のひと時を過ごしたことが挙げられる。そして、最近国においても、大きな動きがあった。2019年に「アイヌ民族支援法」が制定されたのである。法律の正式名は、「アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現する施策を推進する法律」というもの。この法律が制定に至った背景としては、2007年に国連で「先住民族の権利に関する宣言」が採択されたことが挙げられる。その後、国でいろいろな検討の場を設け、アイヌ関係者の意見も聞き、10年の歳月を経ての結果である。この法律制定の翌年、2020年7月に、白老郡白老町のポロト湖畔に「民族共生象徴空間」、即ち「ウポポイ」が建設された。施設としては、国立アイヌ民族博物館、国立民族共生公園、慰霊施設の三つから成る。これらは、アイヌ文化の復興と創造のナショナル・センターとして設置されたということである。日本でもようやく、法的にこれまでと違う形でアイヌ民族が位置付けられるに至ったわけである。

それでは、アイヌ民族はどんな歴史を辿ったのか、その概略を追ってみたいと思う。小生は、アイヌ民族はもともと北海道にのみいたのではなく、本州の東北及びその近辺にも分布していたと思っていた。「蝦夷(えぞ)」「蝦夷(えみし)」と言われた時代である(これは尊称ではなく、蔑称である)。それが、大和朝廷が全国制覇を目指す過程で、そして奈良・平安時代に移行していく中で、征討(懐柔・融和策含む)・反乱が繰り返され、平安時代後期には東北北端まで平定され、和人と同化していったという理解が頭にあった。ところが、福島大学の工藤雅樹教授の研究によれば、「蝦夷日本人説」と「蝦夷アイヌ説」があるという。工藤教授によれば、どちらの説とも断定し難いというのである。そこで、「蝦夷アイヌ説」に立って見れば、どういうことが言えるかという二つある。一つ目は縄文土器が東北北部と北海道南部でその形・文様が同じであること、二つ目はアイヌ語由来の地名が東北北部には多く、南部にも少なからず残っているということ。福島県内で福島市の仁田沼(ニダヌマ)、立子山(タッコヤマ)に、会津坂下町の宇内(ウナイ)に残っているとのこと。小生としては「蝦夷アイヌ説」を採りたいと思うが、いかがだろうか。

ところで、アイヌ民族の北海道での歩みはどうだったのか。北海道の市町村名の8割がアイヌ語に由来するというのだから、そもそもアイヌ民族は全道に先住していたと思われる(カムチャッカ半島や千島列島にも)。アイヌは狩猟採集の縄文時代が本州より永く続いた。その後アイヌは文字を持たなかったが、13世紀頃にはアイヌ文化(和人との交流が始まる中で)が成立をみたといわれる。本州の和人が北海道に定着するのはいつ頃か。道南に定着するのが平安時代末期というから12世紀ごろである。そして農耕の和人と狩猟採集のアイヌとの交易が活発になる。道南に松前藩が置かれるのは、1457年(室町時代)。その松前藩がアイヌとの交易を独占するようになる。そして次第にアイヌの交易上の地位が奪われ、生産現場の労働者へと転じ、アイヌの藩への従属化が進んだ。アイヌが蜂起することもあったが、次第にそれが定着する。それから、江戸時代(蝦夷地といわれた)を経て、明治時代に入る。屯田兵などによる本格的開拓が進められ、アイヌの生活圏域は追い込まれる一方、日本人への同化政策が講じられ、民族として少数化していくのだった。学校の教科書でアイヌを「土人」と表記され、そして何かと差別扱いを受ける。こういう中で国では何らかの対応がなされたのかというと、それが無施策のまま昭和の戦後年代まで続く。ようやく平成9年になり、生活格差是正の一環として「アイヌ文化振興法」が制定されたのである。そして直近の国の動きとしては先に述べた通りの経緯を辿っている。

それでは、アイヌ民族について語る場合、先ずアイヌはアイヌ語という言語は持つけれども、文字は持たなかったことで是非紹介したいことがある。このアイヌ語で口承されていた叙事詩を日本語に対訳したアイヌ人女性がいたのである。知里幸江である。知里の祖母がアイヌ口承の叙事詩”カムイユーカー”の謡い手であった。この叙事詩は、アイヌにとってその価値観、道德観、伝統文化を子孫に伝承していくうえで重要なものであった。知里はアイヌの口承叙事詩を身近に聞くことができる環境で育った。この祖母を言語学者の金田一京助が研究のため訪ねてきたのだ。金田一の熱心さに知里は心動かされる。口承のものを日本語に対訳しようと決意する。その時15歳である。金田一からも託され、助言を得て対訳に本格的に取り組むのだ。そして19歳の時、ついに対訳は「アイヌ神謡集」として完成する。その直後知里は持病であった心臓病が悪化して亡くなる（1992年・大正11年）。日本語に対訳された「アイヌ神謡集」は、その翌年民俗学者の柳田國男の編集「炉辺叢書」の一冊として出版された。これは、絶滅の危機に追い込まれていたアイヌの伝統文化の復権・復活へ重大な転機をもたらしたのである。知里は10代という若さでしかも持病を抱えながら、アイヌにとって大事な、大きな業績を遺したといえる。

もう一つ、アイヌを考える時外せないものに「イオマンテ」つまり「熊送りの儀」がある。これに関しては、本宮出身の伊藤久男が歌った古関裕而作曲の「イオマンテの夜」である。イオマンテは、アイヌの儀礼の一つ（カムイ・ホプニレ）で、ヒグマを狩猟によって殺した後、その魂のカムイ（アイヌ語で、神格を有する高位の靈的存在）を神々の世界に送り帰す祭りのことである。狩猟で殺した直後のヒグマのカムイは、魂の形で両耳の間に留まっているという。そこで、カムイ・ホプニレの儀式では、祭壇を整えてヒグマの頭部を祀り、酒食やイナウを捧げて、そのカムイに神々の世界に帰ってもらうのである。つまり、アイヌではヒグマ(その他の動物にも)にカムイが宿ると信じていたということが伺える。単に人間の捕食の対象とだけ捉えていたのではない。その存在に敬意を払っていたわけである。天（神）からの授かりものといった感覚だろうか。この儀礼を宗教的にどう解するか。その一つを紹介する。ヒグマの姿を借りて人間の世界にやってきたカムイを一定期間もてなした後、見送りの宴を行って、神々の世界へお帰りいただくと解釈する。ヒグマを殺して得られた肉や毛皮はもてなしの礼としてカムイが置いて行った置き土産であり、皆で有難くいただくというわけである。ここには、実におおらかな感じの中に、現代風に言えば自然との関係で「共生の思想」が窺がえると思うがいかがだろうか。

最後に、1970年代後半からの“アイヌの伝統文化復興運動”の高まりについて触れたい。運動の高まりの中で、平取町、白老、旭川などでイオマンテが行われた。また、1982年に札幌の豊平川で鮭の遡上を迎える「アシリチュップノミ」が行われ、1983年には屈斜路湖でシマフクロウの霊を送る儀式が行われた。さらに、「古式舞踊」の保存会も各地に立ち上がり、1984年に国の重要無形民俗文化財に登録され、2009年にはユネスコの無形文化遺産に登録されたのである。この古式舞踊については、小生も阿寒湖畔のコタンで見る機会が得られた。それからアイヌを統括する団体である北海道アイヌ協会は毎年“アイヌ文化祭”を開催してアイヌ文化の周知に努めている。

この稿を読まれた方でアイヌに関心を持って下さる方があれば幸いである。